

民家・町家のこと

HOYA (株) MD 事業部

虎 溪 久 良

Japanese historic houses – conservation challenge

Hisayoshi Toratani

HOYA Corporation MD Division

まず、三遊亭圓窓師匠の「雷月日」という一席のご紹介から。これは師匠が江戸小咄を落語に仕上げたもので、普通は長屋の大家さんとか八つあん、熊さんが主人公ですが、これはお日さまとお月さまと雷さまが登場人物という、宇宙スケールの話です。お日さまがこのところ心配で夜も眠れない。というのは、最近、かわいい末っ子の冥王星が国際天文学会の独断で籍を抜かれてしまった。なんでも遠くを回っていて、しかも小さいからという理由で。そうになると、水星なんか小さいからどうなるか心配だ、ということでお月さまに相談に行きます。お月さま曰く、地球に細○数子という古い師がいて、水星人とか金星人とかを持ち出してズバリ、当てるそうだと、いうので地球に行ってみようということになりました。しかし、お月さんも地球の周りをまわっているだけで行ったことはない。どうしようかと考えたところ、雷さまはときどき地球に落ちるから、雷さまに頼んでみようということになった。雷さま、分かりました、ということでお日さまとお月さまを連れて、ピカピカ、ドーンと落ちたところが浅草

雷門。せっかくだからと観音様にお参りして、仲見世の店をのぞいたりしていたら遅くなったので、今日は一泊して明日、細○数子を訪ねようということになった。近くのホテルに行ったが予約していなかったため満員で断られ、仕方なく裏通りを探したら、民家という雰囲気の旅館が二軒ありました。一つは「芭蕉庵」、もうひとつは「蕪村館」。新しい方にしよう、ということで蕪村館に泊まることにしました。仲居さんに案内されたのが、雷さまは「菜の花」の部屋、お日さまはその西隣の部屋、お月さまは東隣の部屋に。あなるほど、「菜の花や月は東に日は西に」か、と下げに向けて話は続きますが、お後は師匠の高座を聞いていただくということ。

さて、実際の「芭蕉庵」というのは松尾芭蕉が奥の細道の旅に出かける前に住んでいた庵で、東京メトロの清澄白河駅の出口を上ったところ、小名木川のほとりに記念碑が立っています。ここから清澄通りを南に少し歩くと清澄庭園があります。元は紀伊国屋文左衛門の屋敷であつたらしく、その後、下総関宿藩の下屋敷、さらに三菱創業者の岩崎弥太郎の所有になり、現在は東京都の所有になっています。そこから東に向かうと深川江戸資料館があります。ここには江戸時代の深川の町並みが復元してあり、

小規模ですが両国の江戸東京博物館よりもずっと面白いところです。米屋、八百屋、棟割り長屋、船宿、掘割、火の見櫓などが再現しており、照明を変えることで朝昼夜の情景が映し出されています。長屋には棒手振り、三味線のお師匠さんなどが住んでおり、日常使っていた家具・道具類もそのまま置いてあるので江戸時代にタイムスリップした気分になれます。六畳一間の部屋に寝転がってみると落ち着きますねえ、季節がよければ、一人一人住むのにこれだけの空間でも十分かな、という気分になります。屋台の天ぶら屋、寿司屋もあったりして、元々ファーストフードだったんですね、天ぶらや寿司は。

拙宅は大正～昭和初期にかけて流行った「文化住宅」と呼ばれる、和風住宅の玄関脇に一間の洋間が設けられた間取りのもので、戦後の建物ですが築60年ほどになります。あちこちが開口部だらけですので風通しは抜群、瓦を土の上に載せている屋根は断熱がすぐれもので、周りに住宅が密集した都会の真ん中ですが夏は冷房なしで扇風機だけで暮しております。今年の夏はさすがに暑かったですが、何とか切りぬけました。その代わりに冬はすき間風と天然床冷房で寒いですが、炬燵があれば大丈夫です。「家のありようは夏を旨とすべし」という兼好法師の言葉を実感しています。

ところで、岐阜県白川村の合掌造り代表されるような日本の伝統的な民家は各地にあります。現代の暮らしに合わない間取り、台所、風呂などの水回り部分の不便さ、維持管理の大変さといった理由でどんどん壊され、建て替えられています。これらの民家は現代住宅とは全く異なり、30cm角の大黒柱、小黒柱、太い梁など見ただけでもすごいと思う作りです。こういう日本の住まいの文化を何とか残そうという活動を日本民家再生協会(JMRA)が行っています。その活動内容は、(1)情報誌の発行、見学会・セミナー・講座の開催、民家調査などの啓蒙運動、(2)民家の再生、リサイクルの手伝い、

(3)民家の活用による地域活性化です。

啓蒙運動の一つとして、一年間の体験学習を通じて民家の文化を学ぶ「民家の学校」という講座があり、今年で11年目になります。生徒は毎回30名程度、大方は建築関係です。毎年9月の合宿はユニークで、大平宿(飯田市)で行われます。大平宿は200年間栄えた宿場ですが、交通の変遷により過疎化が進み昭和45年には集団離村して廃村になりました。有志によって保存されている家屋に寝泊まりして電気(電燈だけ)・ガス・水道のない、携帯電話もつながらない民家生活を体験することができます。月の光があればほど明るいものとは思わなかったですね。朝の清々しさも格別です。しかし、冬はとても耐えられそうにないというのも実感です。

民家の再生・リサイクルに関しては、民家の提供者と譲り受け希望者の仲介をする「民家バンク」というユニークな仕組みを持っています。これは、民家を譲りたい人に登録してもらい、民家を譲り受けたい人に斡旋するもので、建物は無償提供ですが、解体費、運搬費と民家バンク利用料は譲り受ける人の負担です。登録民家は常時50-100件ありますが、引き取られるのは年に数軒で、多くは解体されて消えていくという状況です。もっとも、民家の古材・建具などを利用して、現代の住まい方に合わせた住宅に作り替えることは、新築よりも手間もかかり、多くの場合、費用も余分にかかるため、ハードルが高いのは止むを得ないのかもしれませんが、5年ほど前に東京に住む会員の方が、塩山の丘の中腹にある民家を購入して再生したいという話になりました。その時は我々も建物内部の実地測量などを手伝いましたが、一年後に見事な民家として再生され、600坪ほどの敷地に桃畑もある住まいで週末を過ごしているやに聞いています。他にも、「民家の学校」のメンバーで、甲州の養蚕民家を移築再生し基礎と建前の他はほとんど自分で行った外国の方、一からほとんど独力で民家を建ててしまった方など



重厚感のある民家に憧れをもち、民家住まいを実行した人は結構います。そういえば「民家の学校」の同期生の一人は沖縄の民家に住みたいと言って3年前に与那国島に移住してしまいました。私ですか？別荘でも持てる身分であれば、民家を移築再生してみたいと思っていますが、なかなか。読者で民家に関心のある方は是非JMRAのHP (www.minka.or.jp) にアクセスしてみてください。写真は3年前に訪れた京都の美山町の茅葺民家です。

さて、重厚な民家に対して、繊細な味わいを持つ町家も日本の住まい文化の代表です。京都には伝統的な京町家の町並みが残っていますが、実態は危機的状況にあります。町家が次々と取り壊されて、マンションやアパート、プレハブの住宅に変わっています。景観保全地域であっても歯抜けのようになっており、祇園甲部など、ごく一部を除いて町家の町並みがきれいに残っている地域はありません。街並み全体がしっかりと保全されているヨーロッパの都市と

比べて何とも悲しい限りです。街全体の景観の統一感と調和に価値を見出すという意識が、日本人にはどうも薄いのではないのでしょうか。京都市内には現在町家がまだ4万8千軒ほど残っていますが、毎年かなりの数がなくなっています。下の図（平成14-18年度文部科学省21世紀COEプロジェクト「京都アート・エンタテインメント創成研究」より）をみると中心部の下京、中京、上京、東山の4区内の町家がどれだけ消えていったかは一目瞭然です。2010年現在ではさらに減っているでしょう。

歴史的、伝統的な町家を住民共有の資産として、今後の京都のまちづくりの中に継承するには、住みやすさ、安全性を改善し、現代の暮らしに活かせる形で町家を再生していくことが重要です。これを目的として「京町家再生研究会」が平成4年に設立されました。「京町家再生研究会」をコアとして、京町家の改修、保全を行う「京町家作事組」、町家に住む人や想いを寄せる人が京町家の暮らしや文化の継承を目指す「京町家友の会」、そして京町家に住みたい人と貸したい人の橋渡しをする「京町家情報センター」の4組織で「京町家ネット」が運営されています。私は3年ちょっと前に「京町家友の会」メンバーになりました。南禅寺の「菊水」での定時総会に初めて出席した折、事務局長の方に見覚えがあると思いましたが、なんと昔々京大の曾我先生の秘書をされていたKさんでした。出会いというのは不思議なものです。友の会の一員として、“京町家の文化の継承に取り組んでいます”，と言え聞こえはいいので



1948



1974



2000

すが、実際は事務局の方々が計画して下さる、見学会やら行事に時折参加して、京町家をとりにくく伝統・文化を味あわせてもらっているというのが実態です。一般の人がなかなか入れないような建物を訪ねたり、京都の伝統工芸の名人のお話を伺ったり、老舗の料亭での例会に参加したり、といろいろと面白い目を見させていただいております。例えば、大徳寺山門の金毛閣、滅多に中に入れてもらえないそうですが、ここに千利休の木像が安置されています。この木像はご存知の秀吉による利休切腹申し渡しの際に磔にされましたが、実はもう一体作られていたそうで、ここにあるのはそれだということです。天井には等伯の豪快な龍の絵が描かれており、いや見事なものでした。京町家ネットでは毎年5-6月にかけて「楽町楽家」というイベントを開催しています。これは会員の方々の町家を拠点に市内60数カ所の会場で行われるコンサート、作品展やワークショップ、オープンハウスなど、五感で楽しむ催し物を通

して、住まいとしての町家の本当の良さを少しでも体感してもらいたいというものです。京町家に関心のある方は是非「京町家ネット」のHP (www.kyomachiya.net) にアクセスしてみてください。

最後にガラスについて一言。昔の窓ガラスは脈理があったり、泡が入っていたため景色が微妙に揺らいで風情有りましたね。ゆらゆらガラスと言うようです。今はすべて完全無欠のフロートガラスになってしまいました。何事もちょっと欠点のある方が深みもあるように思いますがどうでしょうか？

このコラムを書いているのは、今年の異常な暑さの夏がようやく終わったと思ったら、いきなり晩秋の気温、という9月末ですが、「ニューガラス」が発行される12月頃の気候はどうなっているのでしょうか。今年の冬はひどく寒いという予想なので、我が家の天然床冷房の効き具合が気がかりです。